

## コンセプト若者社会学

### ネットワーク—ヒエラルキーからピアへ、ピアからネットワークへ—

同じ「ネットワーク」ということばが使われる場合でも、今日の市民運動の動向を強く意識してそれを中心に論じられることもあれば、非対等な階層構造（ヒエラルキー）による統合として論じられることもある。後者は、大型コンピュータと端末機との交信や、行政内部での諸機関の連携などに関する議論においては顕著である。しかし、ここでは、一般の若者たちの意識や普段の生活にも深く関連する広い人間関係の概念として、そして、従来のヒエラルキー的な発想では行き詰まりになってしまったがゆえに生まれた個を生かすための新しい概念として、ネットワークをとらえておきたい。すなわち、ネットワークとは「自立的価値をもつ者同士の対等な関係のなかでの交流と連携」ということになる。

ところが、今回の調査結果から、一見、ヒエラルキーを嫌ってそれぞれの「自分らしさ」を尊重し合い、軽やかに多彩に展開されているように見える若者の交友関係も、実際には「浅いつきあい」への耐性が弱く、友人という限られた「他者」とだけ同一化しようとする志向のため、結局は、自己の個の確立を阻害する結果に陥っていることが読み取れた。このような限られたインフォーマルな仲間を、ピアと呼ぶ。ピアは、現代社会のヒエラルキーと競争によって疎外された自己を、自分と同種の仲間の集団のなかで回復しようとする「避難場」としてとらえることができるだろうが、ネットワークはそのピアとも異なるものである。そこで、表では、ヒエラルキーとネットワークとの間に、この「ピア」を仲介項としておき、やや冒険的ではあるが、それぞれの特徴を振り分けることによって、ネットワークの独自の意義を浮かび上がらせようと試みてみた。

少なくとも表では、ピアとネットワークの相違は明白である。「やさしい」と言われているはずの青少年が、授業中、罪悪感なしに私語に没頭したり、「いじめ事件」を引き起こしたりする。これらは、「仲間をだいにして、おしゃべりにつきあう」（私語）、「友達と同じ行動をする。異質な部分は自他ともに抑制・排除する」（いじめ）というピアコンセプトの現れでもあるのだ。しかし、私語やいじめの傍観者たちさえ、「まわりにあわせる」「自分がひとに迷惑をかけないことが先決」というヒエラルキーとピアの価値観に染まってしまっており、主体的な批評精神や、批判と信頼などの人間関係能力を失いつつある。そういう若者たちにとっての自己確立のための課題とは、「同一化せずとも『異なる他者』を受容することができるようになるための基本的信

頼感、多少迷惑をかけあっても折り合いをつけることができるようになるための共感的理解の能力、自分らしさを現実のなかで実現するための実践的な自立力」の3つであり、それらの課題は、ヒエラルキーでもピアでもなく、ネットワークの魅力と居心地のよさを実際に味わってこそ、学習され、獲得されると思われるのである。

(西村美東士)

表 ネットワークの特徴  
—ヒエラルキー、ピア、ネットワークの3つの概念の比較・対照から—

| 側面    | 項目      | ヒエラルキー      | ピア          | ネットワーク         |
|-------|---------|-------------|-------------|----------------|
| 関係性   | 基本的関係   | 上下          | 同質          | 水平             |
|       | 相互関係    | 支配と服従       | 仲良し・われわれ意識  | 自立と連帯          |
|       | 交流パターン  | 役割遂行と役割演技   | 人格的交流と仮面的交流 | 流動的役割遂行と共生     |
|       | 関係維持の方法 | 差別的同一化      | 共同的同一化      | 異質の交流と受容       |
|       | 経済的關係   | 従順さへの報奨     | 見返りを期待しない   | ギブ&テイク         |
|       | 友達への態度  | 同調または否定     | 同調または内面的排除  | 共感と自己主張の両立     |
| 個人的意味 | 個の扱い    | 個への外的抑圧     | 個の自己抑圧      | 個(個の深み)の発揮     |
|       | 現実への姿勢  | 勤勉主義        | 敗北主義        | 積極と消極の自己管理     |
|       | 個の安定    | 制度的安定       | 主観的永続性      | 変化(可塑性・流動性)の受容 |
|       | 新規参入の条件 | 競争          | 排他的         | 開放的(個々人の自発的意思) |
|       | 撤退の状況   | 敗北          | 異質化・分派      | 潔い撤退           |
|       | 依存の心理状態 | 一方的依存・共依存※3 | 相互の甘え       | さわやかな依存        |
|       | 要請される資質 | 厳しさと従順さ     | 優しさと協調性     | 自他に対する基本的信頼感   |
|       | 行動目的    | 組織と秩序の維持    | 自己保存        | 自己実現と社会的認知の獲得  |
|       | 行動原理    | 現実原則        | 快感原則        | 共生欲求に基づく自己管理   |
|       | 学習動機    | 成長(上昇)      | 癒し          | 成長と癒しの統合       |
| 社会的意味 | 文化      | 支配的文化       | 下位文化        | 対抗文化           |
|       | 集団風土    | 防衛的         | 支持的かつ防衛的    | 支持的            |
|       | 社会的教育体制 | 学歴(学校歴)偏重社会 | 制度としての教育の忌避 | 生涯学習社会         |

※1 この表は、現実の組織や集団の実態よりも、それぞれの概念的な特徴を重視して整理したものである。

※2 斜体字は筆者がつくったレトリックである。(西村美東士「こ・こ・ろ生涯学習」学文社・参照)

※3 共依存とは、依存する他者を支配することによって充実感をもつ人と、他者を心配させることによってその人を心理的に支配する人との硬直した関係を指す。